
泡沫

OB

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫

【Nコード】

N1928D

【作者名】

OB

【あらすじ】

恋人同士の片桐春香と保住健児。健児は幼馴染の柏木冬乃と両想いであることを春香は知っていた。

高校2年生の春、片桐春香は満開に咲いた淡い桜を見ることがなく自転車ですべていく。春風に吹かれ、ショートカットの黒髪がなびいた。

「健児おはよう」

校門近くの急坂道で春香は自転車から降り、徒歩通学の保住健児と並び歩いた。

「おはよう…。冬乃は？」

「橘たちと一緒に」

健児はふーんと呟き、空を見上げた。

「学校面倒だな…」

健児の呟きに呆れ、また春香は自転車に乗りだすと走り出し、校門をくぐった。

自転車置き場に自分の自転車を入れると、突然春香は後ろから肩を軽く叩かれた。

「おはよう」

金髪に染めた短髪でまさに不良の格好をした荒井恭太郎がだらしない声で春香に挨拶。

「おはよう、2年生からの目標決めた？」

1ヶ月程前に春香は恭太郎に対し、目標を掲げることが提案していた。

「暴力はしない、イジメはしない。それと、千秋と付き合うこと」

「千秋と付き合いたいのか？ あんたが？」

春香は驚き、笑ってしまった。

「何だよ…」

恭太郎はずっと笑い続ける春香にムツとして、軽く睨んだ。

「だって、千秋は真面目だし、恭太郎みたいなのは付き合ってくれないよ」

春香は笑いを止め、真顔でキツパリと答えた。

「どこを直せばいいんだよ？」

「…とにかく全体的にかな」

恭太郎は肩を落とした。

「無駄な努力するより普通に過ごしなよ恭太郎、またね」

「はいはい、またな」

春香と恭太郎は別クラスのため、別れた。

教室に入ると窓際ですっとグラウンドを眺める健児がいた。

「冬乃来た？」

「ああ」

春香は健児の隣に立つと同じ方向を眺める。

グラウンドには校舎に入っていく学生たちがたくさんいた。

「ふゆのー！！」

春香は大きく手を振り外に向かって大声を出す。すると、彼女の声

に気付くようにグラウンドを歩いているかしわぎふゆの柏木冬乃も大きく手を振り、

「はるかー！！」

と、大声を出した。

春香の隣にいる健児も無言で冬乃に向かって小さく手を振る。

「けんじー！！」

冬乃は元気よく満面の笑みでもう一度大きく手を振った。その笑顔に少し照れ、健児は手を振るのをやめる。

長い髪を後ろで結い、冬乃は春香に背後から抱きつく。

「おはよう！ 春香、今日部活あるの？」

「うん、今日は休み」

「じゃあ、どこか遊びに行こう！」

他愛のない会話を続ける2人を黙って見ている健児は途中アクビをしながら暇そうにしている。

「健児も行く？」

「ああ」

春香に聞かれ健児はいい加減な返事をした。

朝のホームルームが終わり、春香たちは授業のため別の教室へ移動する。移動中、図書室を通りかけた時春香は何かを思い出し、図書室を覗いた。

そこには案の定、金髪に染めた恭太郎がいた。

「なあ、俺のどこが悪いんだ？」

図書室の受付の女子にしつこく話しかけている。

「金髪、ピアス、格好」

図書室の係りを務めている長谷部千秋はせべちあきは真顔で即答。

「それ直したら付き合ってくれるのか？」

「多分」

千秋は立ち上がり、図書室を出て行く。恭太郎は愕然と肩を落として頭を抱えた。

「おはよう、千秋」

「おはよう、春香。冬乃は？」

「橘と一緒に3階まで行つたよ」

春香のかわりに健児が千秋に説明した。

「そう。春香たちは1限目は移動教室なんだ」

「うん、千秋は？」

「古典で移動教室」

春香と千秋は笑顔で会話をしながら階段で昇って行く。図書室から出てきた恭太郎は元氣のないままピアスを外し、ポケットに入れた。健児は軽く恭太郎に手を振り、春香たちの後ろについていく。

恭太郎も軽く手を振り、階段で下に降りていった。

「春香、誰にメール送信してるの？」

「んー、元氣の無い友達に激励のメール」

春香はメールを送信したあと、ケータイをポケットにしまった。

下に降りた恭太郎のケータイから音楽が流れ、慌てて画面を見るとメールが届いていた。

「春香からか…」

本文の文を黙読した。

『ばーか』

「うるせえ！」

1人空しくケータイに怒鳴り、落胆する。

春香は千秋と別れ、講義室へ入ると冬乃がジャージ姿の橘に抱きついていた。

それを見た健児の顔は一瞬だけ不機嫌そうに眉をしかめた。

「冬乃、そろそろチャイム鳴っちゃうし放してあげなよ」

「はい」

冬乃は春香に言われた通り橘を放した。

「失礼します！」

橘は照れながら急いで講義室から出で行った。

「嫉妬深い奴…」

春香は健児の態度に呆れ、呟いた。

すべての授業が終了し、放課後になった。

「春香、用が出来たから校門で待ってる」

「わかった」

大体予想はわかっている為、春香は冬乃にも声をかけなかった。

そのまま帰る準備をして教室から出て行った。

「よう、春香」

「あ、馬鹿だ」

「…ふざけんなよ」

恭太郎と一緒に校舎を出ると、自転車置場まで仲良く歩く。

「なあ、春香。お前本当に健児のこと好きなのか？」

「さあ、どうなんだろう」

春香は突然の質問に少し戸惑いながら、曖昧な返事をした。

「意味がわかんねえよ…。キスしたことあんのか？」

「ない」

「えっちはあんのか？」

「ない」

「なんでだよ」

「…そういうのできないんだよね、私」

自分の自転車を取り出し、校門まで乗らず引つ張って行く。その後ろを恭太郎は着いていった。

放課後の教室。健児は誰もいない教室で初恋の相手と面と向かい合っていた。

「健児、何か用？」

後ろで結っていた長い髪を肩の下まで落とした。

「冬乃、話したいことがあるんだ…」

「？ 2人きりで話す必要ないじゃん」

冬乃は不思議そうに健児を見つめていた。

「…俺と付き合ってくれ」

照れることなく、どこまでも真剣な眼差しで冬乃を見つめた。

冬乃はしばらく黙り、窓越しにグラウンドを必死に走る橘を少し眺めた。

「そっついえばさ、中学校のときも私に告白したよね？」

健児は黙って頷く。

「…断ったのに、また告白するんだね」

冬乃の目から涙が少し溢れ、こぼれそうで健児の顔を見れなかった。

「ごめん、無理だよ」

「…なんでだめなんだ？」

家庭の事情。冬乃は言いたくても言えない。

「私だって健児のこと好きだよ。でもむ…!？」

突然健児に両腕をつかまれそのまま唇を塞がれた。

春香は校門から見える自分の教室を眺めていた。

「…」

溜息をすると、地面に座っている恭太郎の金髪の髪を撫でた。

「何だよ？」

「私の本当の恋愛はいつも片想いなんだよね」

冬乃に頬を平手打ちされた健児を眺め、春香はこれは本当の恋愛じゃないと考えていた。

「私は健児のこと好きっていうわけじゃないし、本当に好きな人はいつも違う女の子のことしか見てなくて、私になんて見向きもしてくれなかった」

恭太郎は黙って聞いていた。

「…こんな悩み、小さい時から一番の友達のアんただからこそ言えるんだからね」

本当は恭太郎のことが好きだなんて春香は言えるはずなく、恭太郎の頬を軽く引つ張った。

「お前、相変わらずそこばつか触る奴だな」

「感触気持ちいいもん」

「意味わかんねえよ…」

恭太郎は春香の好きなようにさせ、呆れながら壁にもたれた。

「彼氏がいるのにいちやつくなよ…」

頬を真つ赤に腫らした健児が不機嫌そうに2人を見た。

「冬乃は？」

「用ができたから今日は遊べないってさ」

春香は恭太郎の頬を引つ張るのをやめて、健児に近づいた。すると、健児の頬を思いつきり引つ張った。

「イテ」

痛そうにしている健児に春香は微笑しながら呟く。

「浮気者」

引つ張るのをやめて、春香は自転車に乗って坂道を降りていく。
「先に行ってるねー！！」

春香は大声で健児に伝える。

「はぁ……」

「浮気者だつてよ」

恭太郎は立ち上がり、坂道を降りる。健児もゆっくり坂道を降りていく。

「なぁ、俺って欲張りか？ 冬乃も春香も好きって言つのは……」
健児は恭太郎に質問する。

「いいんじゃないの？ 俺は羨ましく思えるよ」

恭太郎の返答に健児は少し笑った。

f i n

（後書き）

読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928d/>

泡沫

2010年10月27日13時59分発行